

# the People

元気なまちには 元気な主張を続け  
元気に行動する 市民がいる

the people (ザ・ピープル)  
2017年 新春特別号

発行：特定非営利活動法人 ザ・ピープル  
代表者：吉田 恵美子  
所在地：福島県いわき市小名浜字蛭川南5-6  
タウンモールリスポ内

TEL:0246-52-2511 FAX:0246-38-9538  
E-mail: the-people@email.plala.or.jp  
U R L: http://npo-thepeople.com/



## 2017年新春を迎えて

新春をお慶び申し上げます。旧年中は大変お世話になりました。本年もよろしくお願ひ申し上げます。

アメリカでトランプ政権が動き出すということで、何となくざわついた年明けとなりましたが、ピープルにとっても2017年の幕開けはこれまで通りではなく、新たな道を探る旅の始まりを予感させるものとなりました。

今春には、福島県内の原発事故の影響の残るエリアの中でも、帰還困難区域以外では避難解除が相次ぐことになっています。それに合わせて、自主避難者への住宅補助が打ち切られることにもなります。「震災後」からの脱却の動きに拍車がかかるのが、今春のタイミングということでしょう。被災者・避難者の方たちと向かい合う活動を実践してきた本会にとっても、判断を求められる時期にさしかかっていると云えます。

そうした流れを受け、本会では現在、これまでの被災者・避難者支援事業の推移を検証する作業を行っています。(福島県ふるさとふくしま交流・相談事業)被災直後から、時間の経過の中で地域課題が変化するのに応じて形を変えてきた支援活動を、もう一度きちんと検証することで今後の活動へ活かそうという取り組みです。近々冊子としてまとまる予定です。ご希望の方は、ご連絡下さい。

他にも、私たちを取り巻く周辺環境には変化の兆しが見て取れます。そうした変化を真摯に受け止め、それに対応できるよう努力を重ねていきたいと思っています。皆様の今後も変わらぬご支援、ご指導を心よりお願い申し上げます。



## ふくしまでコットンを育てるといふこと 映画「ザ・トゥルー・コスト」上映とトークのタベ



東日本大震災をきっかけに、いわき市内を中心として有機農法による在来種のコットン栽培が行われるようになって5年が経過しようとしています。市内外で栽培されるコットンは、2.4haで、昨年度シードコットン690kg。国内有数のオーガニックコットン栽培地に成長を遂げています。化成肥料や農薬、殺虫剤を使わない農法にこだわり続けていること背景には、原発事故という大きな環境負荷から再生するにあたって、環境に負荷をかけない農業を志したいという強い思いがあります。実は、世界中で行われているコットン栽培は、農薬の多用など多くの問題をはらんでいるのです。

コットンに限らず、私たちがこれまで当たり前だと思っていた「衣」の裏側に潜む問題を描く映画「ザ・トゥルー・コスト」の上映を通して、改めてオーガニックコットンをふくしまで育てることの意味を皆で問い直す機会を持ちたいと思います。また、「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」の活動と成果をまとめた動画を作成し、その上映も併せて行います。

更に、自社のコットン製品を全面的にオーガニックに切り替える決断を行ったパタゴニアの日本支社長 辻井隆行氏をゲストとして招き、トークの中から将来に向けた展望を描きます。パタゴニアは、「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」の栽培を応援する協賛企業の一つでもあります。ぜひ、ご参加下さい。

なお、本事業は福島県ふるさとふくしま交流・相談支援事業の一環として行われます。

## 厚生労働大臣賞受賞

本会の活動は、丸26年を経過しました。NPO法人がまだ地域の中に全くなかった時代から、ボランティア活動を途絶えることなく継続してきたことが評価され、この度、厚生労働大臣賞を受賞させていただきました。沢山の皆様のご支援の賜物と、心より感謝申し上げます。



## ミクロネシアに希望の明かりを届けよう!

この度、今年の太平洋・島サミットの開催地がいわき市に決定しました。一昨年に引き続き2度目の開催ということになります。前回のサミット開催がきっかけとなって、本会では昨年11月にミクロネシア共和国チューク州の高校や離島にソーラーパネルの明かりを届ける事業を行ってきました。

使用したソーラーパネルは、全て震災後に福島の子供たちがハンダゴテを使ってセルと言われる部材を1枚ずつつなぎ合わせて作り上げたものです。通常は、子供たちの通う学校の校庭等に防犯灯を設置するために使用しているのですが、制作した子供たちから「震災の時にお世話になったので、このパネルで灯す明かりを必要としている人たちに届けて下さい!」との声が上がったことで、今回のプロジェクトが企画されました。

今回のプロジェクトでは、自家発電以外の電源を持たない2つの離島と本島にある高校で、合計5枚のソーラーパネルの設置が行われました。いずれの場所でも、福島から出向いた技術スタッフが、ソーラー発電の仕組みや保守管理の方法を島民や高校生に実際に指導し、長く使用できる体制を形作ろうとしてきました。特に、本島の高校では、この地域の将来のリーダーを目指す若者たちに技術を伝えることで、彼ら自身の手でいつの日か離島に明かりを灯せるようになる日を思い描きながらの指導となりました。

なお、この事業は、いわき市の委託を受け、いわきおてんとSUN企業組合の技術協力の下実施されました。



「最近高齢者ドライバーによる悲惨な交通事故のニュースが相次ぎ、社会不安の一つとなっている。私自身、一昨年高齢者講習を受けたばかりなので他人事ではない。「免許証を返上しないでいつまで頑張るつもりですか」と問いつつまで頑張るつもりで返してしまおう」と今年に入ってから、65歳以上と定義されている「高齢者」を75歳以上に見直すよう求める提言が日本老齢学会などから発表された。また前期高齢者とされている65〜74歳は活発な社会活動が可能で、75〜79歳は活発な社会活動が可能な人達が多いとされている。このように区分すべきの提言がある。このニュースに多くの人達が納得している様である。勿論私もその一人。我が国の高齢化は、世界に例をみない速度で進行している、どの国も経験したことのない世界の高齢社会を迎えているのだと改めて自覚せざるには生きていけない。話が変わるが、いわき市では毎年市内の65歳以上の高齢者約3万5千人に對し敬老の日記念品を配付している。その製作は福祉作業所が担っているが、今年度は手のひらサイズのコースターで製作の苦勞がしのげる。毎年違った作品で、布袋であつたり手元に置ける可愛らしい物だつたりと喜ばれている。先頃同級生数人と雑談をして折「今度の敬老記念品木製のコースター素敵だね。我が家では2個頂いてきたよ」と一人の同級生が発言。私は不思議に思つて「エ〜お宅おじいちゃんとおばあちゃんいたかしら」と質問した。「なに言つてるのよ、私と主人の分よ。全く自分の年齢を自覚してないんだから呆れる」と咎められ爆笑となつた。「確かに私は75歳だつたのだ」とその場で我に返る心境だつた。そんな中昨年暮れ、ウィルス性肺炎に罹つてしまった。咳が止まらず、夜布団に入るのが恐怖だつた。1ヶ月間ほど体調が戻らず苦しい毎日だつたが、最近ようやく深呼吸がこんなに美味しい物だつたと気付けるようになり今は感謝の日々である。忙しさの中で自分の歳も忘れ元氣だけが取柄とばかり走り続けて来た生き方など褒められたものではない。ところで仏法では「増上慢(慢心)」について次のように説いている。「種々の慢心を起こし、自分は他人より優れて元氣に活動してきただけに、私自身は今まで事故を起こさなかったから大丈夫」「健康にも氣をつけているから大丈夫」といった過剰な自信を持っていたのは確か。しかし今度ばかりは「慢心だつた」と痛感した。これからは病氣や事故などばかりでなく、あらゆる場面で「自己の慢心」を謙虚に見つめ直す生きかたをしようと思つた私である。(甘南備)

## つばやき

最近高齢者ドライバーによる悲惨な交通事故のニュースが相次ぎ、社会不安の一つとなっている。私自身、一昨年高齢者講習を受けたばかりなので他人事ではない。「免許証を返上しないでいつまで頑張るつもりですか」と問いつつまで頑張るつもりで返してしまおう」と今年に入ってから、65歳以上と定義されている「高齢者」を75歳以上に見直すよう求める提言が日本老齢学会などから発表された。また前期高齢者とされている65〜74歳は活発な社会活動が可能で、75〜79歳は活発な社会活動が可能な人達が多いとされている。このように区分すべきの提言がある。このニュースに多くの人達が納得している様である。勿論私もその一人。我が国の高齢化は、世界に例をみない速度で進行している、どの国も経験したことのない世界の高齢社会を迎えているのだと改めて自覚せざるには生きていけない。話が変わるが、いわき市では毎年市内の65歳以上の高齢者約3万5千人に對し敬老の日記念品を配付している。その製作は福祉作業所が担っているが、今年度は手のひらサイズのコースターで製作の苦勞がしのげる。毎年違った作品で、布袋であつたり手元に置ける可愛らしい物だつたりと喜ばれている。先頃同級生数人と雑談をして折「今度の敬老記念品木製のコースター素敵だね。我が家では2個頂いてきたよ」と一人の同級生が発言。私は不思議に思つて「エ〜お宅おじいちゃんとおばあちゃんいたかしら」と質問した。「なに言つてるのよ、私と主人の分よ。全く自分の年齢を自覚してないんだから呆れる」と咎められ爆笑となつた。「確かに私は75歳だつたのだ」とその場で我に返る心境だつた。そんな中昨年暮れ、ウィルス性肺炎に罹つてしまった。咳が止まらず、夜布団に入るのが恐怖だつた。1ヶ月間ほど体調が戻らず苦しい毎日だつたが、最近ようやく深呼吸がこんなに美味しい物だつたと気付けるようになり今は感謝の日々である。忙しさの中で自分の歳も忘れ元氣だけが取柄とばかり走り続けて来た生き方など褒められたものではない。ところで仏法では「増上慢(慢心)」について次のように説いている。「種々の慢心を起こし、自分は他人より優れて元氣に活動してきただけに、私自身は今まで事故を起こさなかったから大丈夫」「健康にも氣をつけているから大丈夫」といった過剰な自信を持っていたのは確か。しかし今度ばかりは「慢心だつた」と痛感した。これからは病氣や事故などばかりでなく、あらゆる場面で「自己の慢心」を謙虚に見つめ直す生きかたをしようと思つた私である。(甘南備)